第２章　草津市の概要

１　草津市の概要

（１）　自然環境

ア）　位置と地勢

本市は琵琶湖の東南に位置し、市中央部から南部にかけて、信楽山地およびこれに連なる金勝（こんぜ）山地から延びる瀬田丘陵が発達している。また、市北部には沖積低地が発達するとともに、旧野洲川が形成した自然堤防が掌状に形成され、古くから人々の生活の場となっている。さらに湖岸の下物（おろしも）地先では、烏丸半島に尖角三角州状の湖岸線が形成されている。市南東部に広がる丘陵と山地は、標高 250mを越える場所は見られず、多くは標高 150m前後である。また、丘陵の先端部には比高 1～2mの段丘崖が存し、湖岸の沖積地との境界をなしている。

このように、本市の地形は、湖岸および沖積低地が発達した北部、沖積低地および丘陵部の広がる中部・南部に分けることができる。

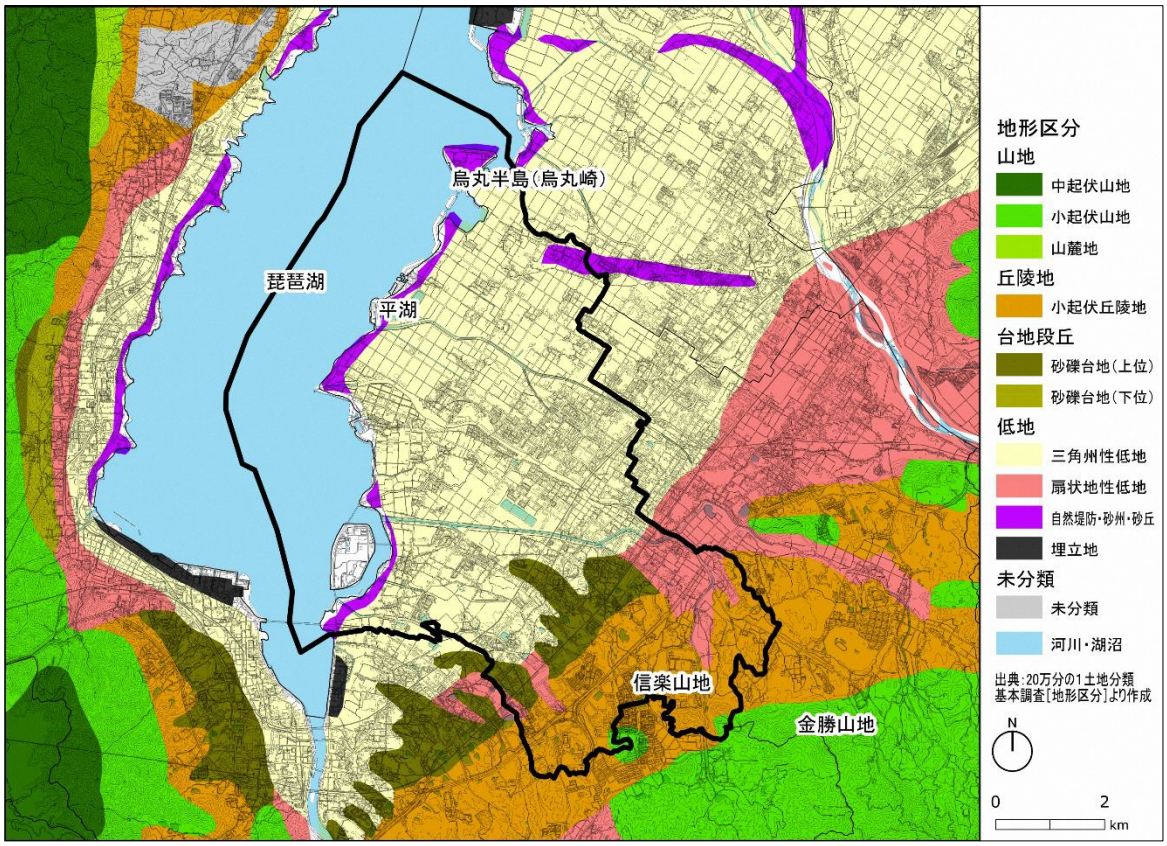

図 2-1　草津市の地形区分

イ）　地質

市域南部の山地を構成する岩石は砂岩、泥岩（でいがん）、頁岩（けつがん）、チャートおよびこれらが熱の作用で変質したホルンフェルスからなる。丘陵部には粘土・砂・礫によって構成される古琵琶湖層群が広がり、丘陵末端で、同層は沖積低地の下へと潜り込んでいる。丘陵部を形成する地層は脆弱であり、中小河川によって下流に多くの土砂が運ばれ、自然堤防が発達した。

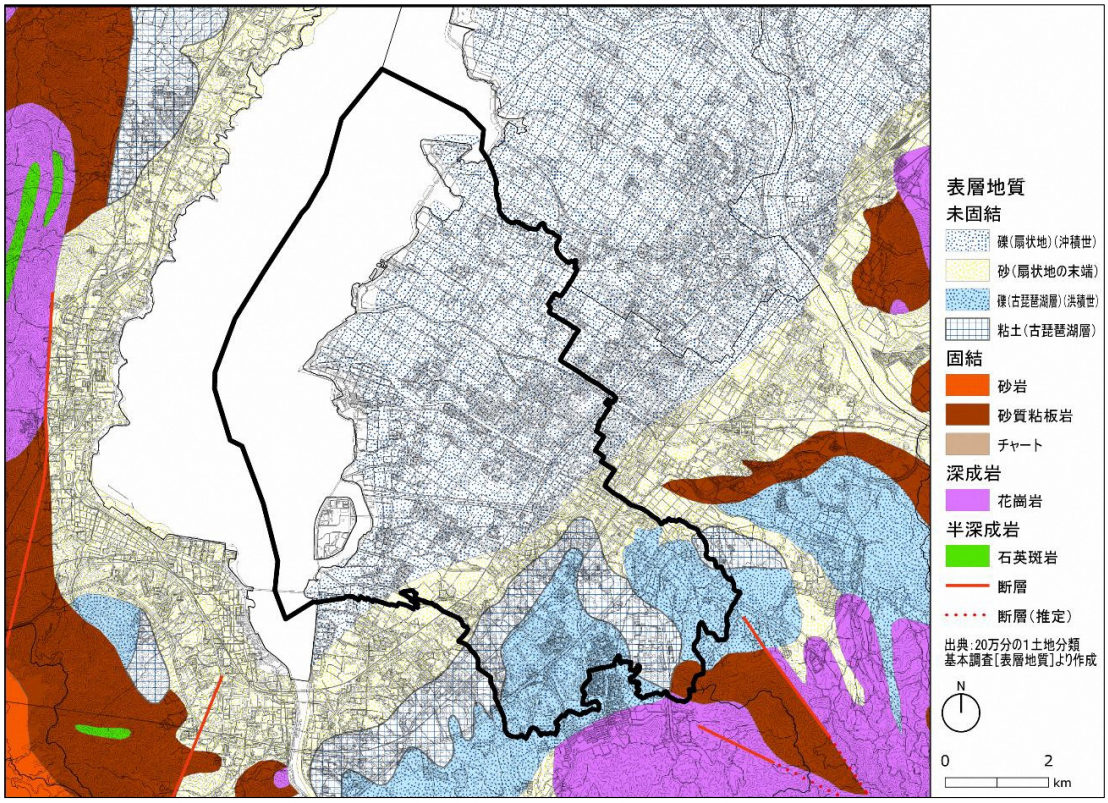

図 2-2　草津市の地質図

ウ）　水系

本市の西部は琵琶湖に接し、水系は、市域南部の金勝山地および瀬田丘陵を源とするものと、市域北部の旧野洲川より注ぐものとの、2 つに分けられる。

このうち、南部の河川は、金勝山地ならびに瀬田丘陵から供給された大量の土砂が堆積し、天井川が発達している。天井川は周囲より川底が高いため、一度堤防が決壊すると、周囲へと全ての水があふれだすことから、洪水のリスクが高く、例えば、旧草津川では享和 2 年(1802)に大雨により洪水が発生した記録があり、その後も明治 18 年(1885)や昭和 28 年(1953)などに、浸水被害が発生している。また、明治 29 年(1896)には豪雨により琵琶湖水位が+3.76m の過去最高水位を記録し、本市でも浸水による建物などへの被害が発生した。平成 14 年(2002)の草津川平地河川事業で流路が付け替えられ、通水後は市街地の水害に対するリスクは軽減されている。

エ）　気候

本市は、瀬戸内式気候に属し、『草津市統計書』(平成 29 年(2017)版)によると平成 29 年の年間平均気温は 15.0℃、年間降水量は 1,412mmを測る。例年、8 月から 10 月頃に台風などの影響で降水量が多くなる傾向があり、11 月から 1 月にかけての降水量は非常に少ない。

また、近年は、温暖化に起因するとされる夏季のゲリラ豪雨や大型台風の襲来が顕著となっており、本市でも歴史資産への影響が危惧される状況となっている。

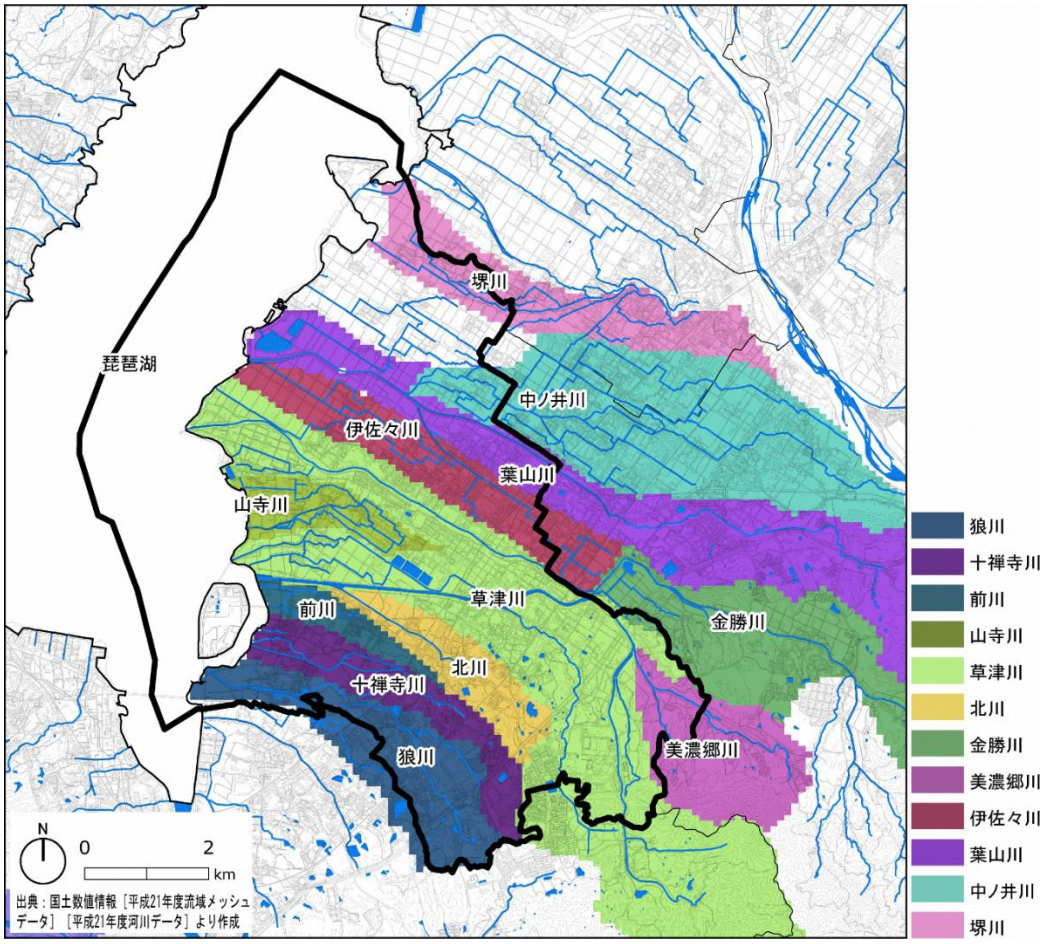

図 2-3　草津市の水系

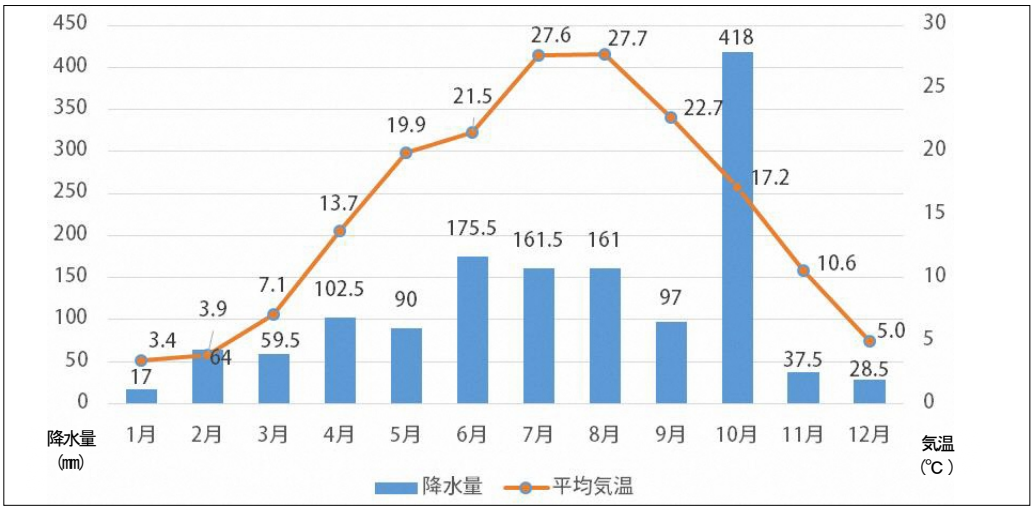

図 2-4　草津市の気候　（『草津市統計書』（平成 29 年版））

オ）　植生

市内には 1,287 種の植物の生育が確認されている。そのうち草本類が最も多く、309 種を占める。特に、『滋賀県レッドデータブック』（平成 22 年(2010)版）に記載されている絶滅が危惧される植物のうち、52 種が自生する。一方で、本来自生していない帰化植物も 268 種存在する。

かつて本市では、シイ・カシなどを中心とする暖帯性の常緑広葉樹の一大森林帯が形成

されたと考えられている。しかし、人々の活動により常緑広葉樹の森林植生は失われ、現在は、小槻神社(青地町)、大宮若松神社(南山田町)、山田正八幡宮(北山田町)、若宮八幡神社(西矢倉三)、印岐志呂神社(片岡町)など、一部地域に残存が認められているにすぎない。

常緑広葉樹に代わり、現在、市域の森林はアカマツが主体となっている。アカマツは、高度成長期前までは、下生えの雑木が家庭用燃料として利用され、さらに松根油の原料として、また商品作物のマツタケの育成林として人々により保護されてきたが、高度成長期以降、アカマツの森林が広がる丘陵部が大規模宅地造成、大学建設、高速道路建設などの大型開発が進み、アカマツの森林は急速にその姿を消しつつある。

丘陵部の谷底平野あるいは谷を堰き止めた溜池周辺には、中間湿原に認められるヌマガヤ・チゴサザやモウセンゴケ・サギソウなど、湿原植物が繁茂しているが、これらの植物についても、丘陵地の開発により急速にその姿を失いつつある。

一方で本市の歴史文化の形成に影響を及ぼした植物も多く、まず、諸国六玉川の１つに数えられた萩の玉川は、その名が示すとおり、古代から中世にかけて萩の景勝地として知られていた。かつての萩の玉川の位置は必ずしも明らかでないが、地名や文献などの検討から、野路町付近の丘陵部の谷底低地に形成された湿地帯がそれではないかと推測されている。

さらに、湖岸の志那浜は、中世から近世にかけて蓮花の景勝地として知られ、多くの文人墨客が訪れた。しかしながら、現在は、琵琶湖総合開発などにより当時の様子をうかがうことは難しい状態となっている。

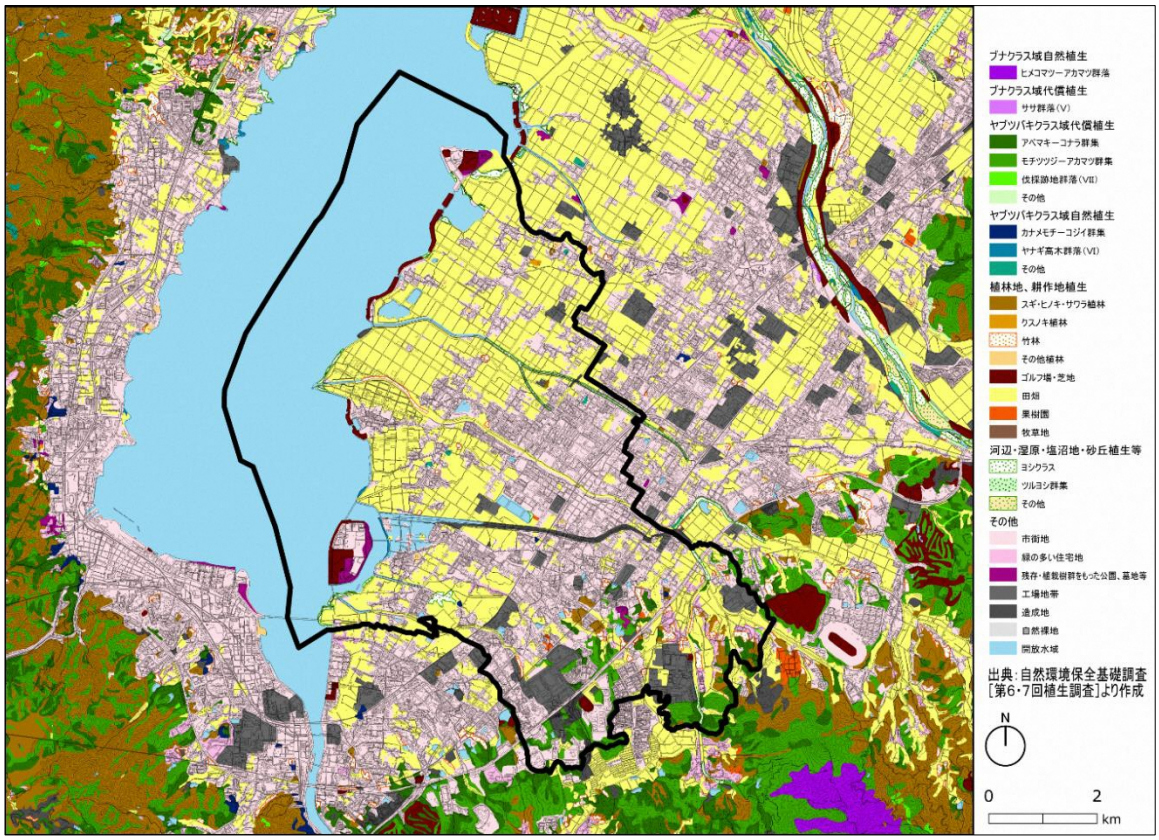

図 2-5　草津市の植生図

次に、志那町吉田にある三大神社には、平成 15 年(2003)に草津市指定天然記念物に指定され、地元で樹齢 400 年と伝える野田フジの古木が伝存しており、地元保存会により守り継がれている。

三大神社の北に位置する志那中町の惣社神社にも、社伝に樹齢 400 年と伝わる野田フジの古木が伝存している。かつて行った樹木調査では、樹齢は不明であるが、三大神社のフジと花房や樹木の容姿などが近似しているという調査結果が得られている。

また、志那町の志那神社にも野田フジが伝存している。これら 3 カ所では、志那三郷のフジとして、開花時期には多くの見学者が訪れている。

図 2-6　萩の玉川　歌川広重画「諸国六玉川近江野路」（草津市蔵）

次に、川原町の最勝寺には、樹齢 400 年を数えるツバキの古木が伝存し、平成 15 年(2003)に草津市指定天然記念物として指定されている。毎年、手のひらほどもある大輪の花弁をつけることで知られる。

さらに、旧草津川の堤防にはサクラの並木が存在する。明治 43 年(1910)以降、地元の草津尋常高等小学校(現、草津市立草津小学校)によりサクラとカエデの植樹が行われ、以後、サクラの名所として親しまれている。市民の手で植樹されたサクラが成長し、春には、桜まつりから名称を変えた草津宿場まつりが催される。

図 2-7　かつて草津川のサクラ並木（昭和初年頃）

「近江八景矢橋の帰帆」で知られる矢橋港の入口にあるイチョウは、樹齢 250 年と伝えられる巨木で、湖上からの船の目印にされていたといわれる。

なお、これらの樹木ならびに市内の名木などについては、自然環境保護の観点から「自然環境保全地区」および「保護樹木」の指定をしているものもある。

図 2-8　三大神社のフジ

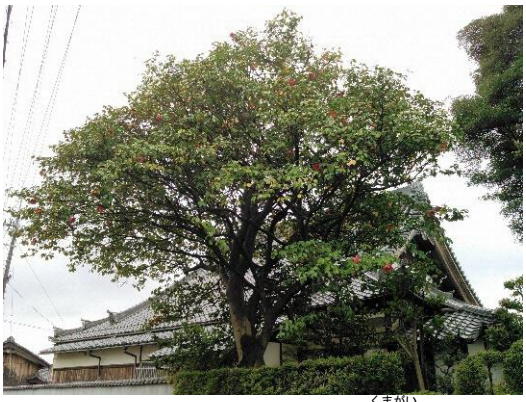

図 2-9　最勝寺のツバキ（熊谷）

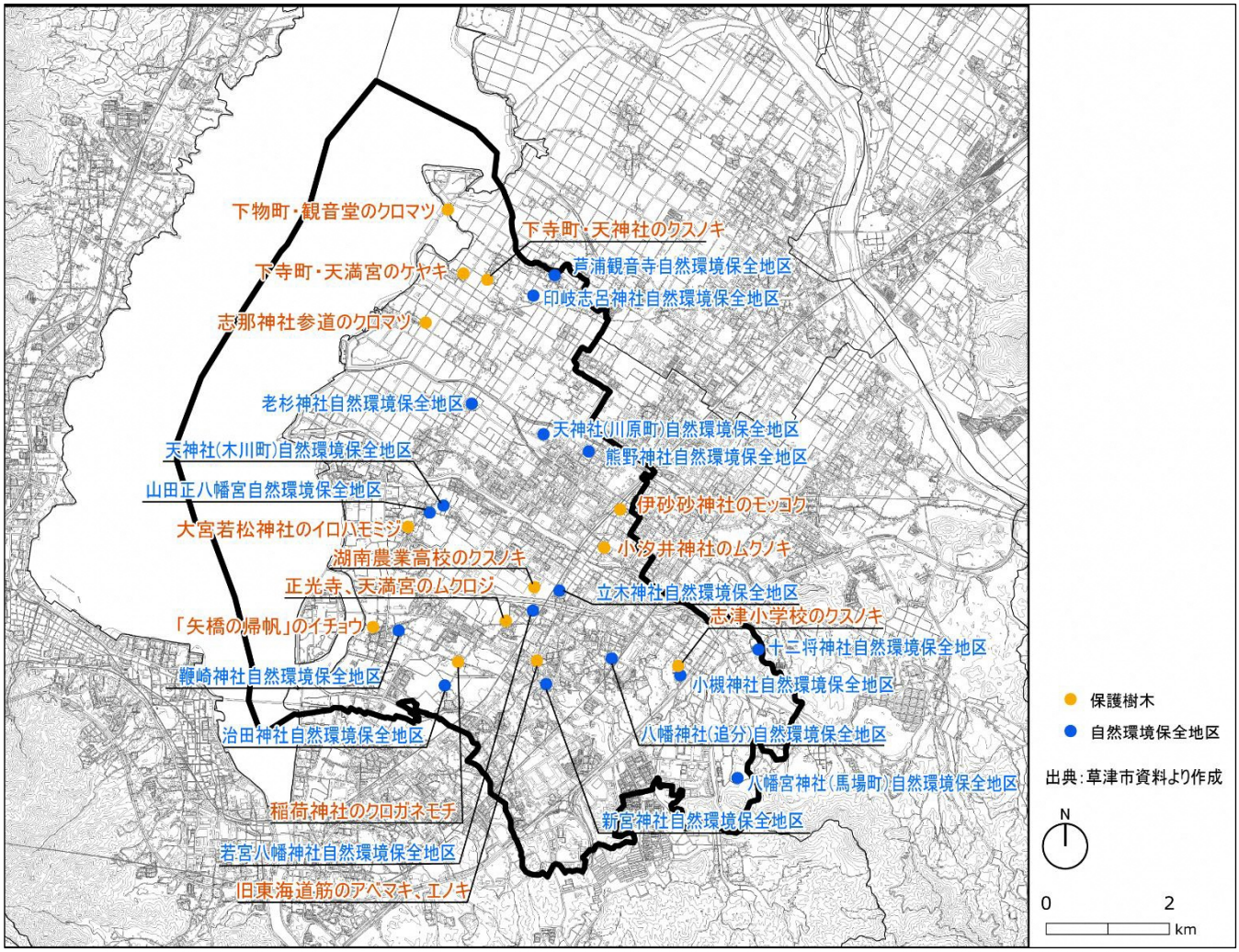

図 2-10　草津市の自然環境保全地区と保護樹木

表 2-1　草津市の自然環境保全地区一覧

保全地区名称	所在地	指定面積(㎡)	指定日
立木神社　自然環境保全地区	草津 4	10,197	S61.8.7
小槻神社　〃	青地町	16,946	同上
熊野神社　〃	平井 3	8,000	S62.8.18
印岐志呂神社　〃	片岡町	7,041	S63.7.8
芦浦観音寺　〃	芦浦町	11,000	同上
天神社(川原町)　〃	川原 4	7,248	H4.4.20
老杉神社　〃	下笠町	12,660	同上
天神社(木川町)	木川町	5,946	同上
山田正八幡宮　〃	北山田町	5,934	同上
治田神社　〃	南笠町	6,631	同上
新宮神社　〃	野路 6	5,770	H6.4.15
若宮八幡神社　〃	西矢倉 3	4,616	同上
八幡神社(追分)　〃	追分 5	4,160	同上
八幡宮神社(馬場町)	馬場町	5,751	同上
十二将神社　〃	山寺町	13,408	同上
鞭崎神社　〃	矢橋町	7,143	H24.3.1

表 2-2　草津市の保護樹木一覧

保護樹木	樹齢(年)	指定日
志津小学校のクスノキ	140～180	H17.3.1
湖南農業高校のクスノキ	40～100	同上
小汐井神社のムクノキ	500(伝)	同上
伊砂砂神社のモッコク	150	同上
正光寺、天満宮のムクロジ	130	同上
稲荷神社のクロガネモチ	80～120	同上
旧東海道筋のアベマキ、エノキ	100～150	同上
大宮若松神社のイロハモミジ	100	同上
下寺町・天満宮のケヤキ	120	同上
下物町・観音堂のクロマツ	200(伝)	同上
下寺町・天神社のクスノキ	190	H21.3.1
「矢橋の帰帆」のイチョウ	250	同上
志那神社参道のクロマツ	50～70	同上

カ） 動物

平成 26 年(2014)の調査によれば、本市域では鳥類は 35 科 113 種が確認されている。一方、近年カラスなどにより、社殿など歴史的建造物の屋根が巣材として抜き取られる被害が顕著となってきている。

哺乳類は、7 科 11 種、うち小型哺乳類 8 種、大中型哺乳類 3 種が確認されている。

このうち、大中型哺乳類にイノシシ、ニホンジカ、ニホンザルがいるが、市内に十分な面積の森林がないことから、定住しているのではなく、市外から一時的に食べ物を求めに来ているものと考えられている。一方、飼育されていたと思われるアライグマが野生化し、その個体数を増加させつつある。アライグマによるとみられる寺社建造物への影響も確認されている。

爬虫類は 8 科 13 種を確認し、両生類は 5 科 11 種の分布を確認している。特に滋賀県の指定希少野生動植物種であるナゴヤダルマガエルが湖岸の水田地帯に分布することは特筆に値する。

魚類は、8 科 34 種が確認されている。魚類以外の水生生物では、昆虫類 105 種、甲殻類 7 種、貝類 13 種、その他 4 種の計 129 種が確認されている。また、外来魚の繁殖により、在来魚の減少がみられ、本市の伝統食である鮒ずしの材料となるニゴロブナに大きな影響が発生している。

昆虫類は、252 科 1,368 種が確認されている。ナガサキアゲハ、タイワンウチワヤンマ、ミナミアオカメムシが近年の温暖化の影響で草津市内に分布域を広げ、また、近年の動向としてアメリカミズアブなどの外来種が増加してきている。

（２）歴史的変遷

ア） 先史・古代

本市域で人々の活動が認められるのは縄文時代からである。この時期の遺跡は、市北部では旧野洲川の形成した自然堤防付近、市中部から南部にかけては丘陵部に顕著である。

当時の住居跡は未確認であるが、丘陵部に位置する野路岡田遺跡では、縄文時代中期末から後期の貯蔵穴とみられる土坑が、同じく丘陵部の横土井（よこどい）遺跡からは、落し穴とみられる土坑などがみつかっている。

図 2-11　市指定中沢遺跡出土祭祀関連遺物一括（腰掛）

図 2-12　北谷 11 号墳出土仿製方格規矩鏡（滋賀県立安土城考古博物館所蔵）

続く弥生時代には、市域中部の中畑遺跡で、初期農耕の痕跡を示す籾痕がついた弥生時代前期の土器が出土している。また、沖積低地の宮前遺跡や湖岸の烏丸崎（からすまざき）遺跡などでは、弥生時代中頃と推測される玉作りの痕跡が確認されており、弥生時代後期には中沢遺跡において舟形木製品など多くの木製品が旧河道から発見された。

古墳時代に入ると、集落が増え、丘陵部の山寺町には、前期古墳として知られる北谷 11 号墳が築かれ、出土品として仿製方格規矩鏡（ぼうせいほうかくきくきょう）や鍬形石（くわがたいし）

の他、多量の鉄器がみつかっており、この地を治めた有力人物の墓と考えられている。

飛鳥時代に入ると市指定史跡花摘寺跡、観音堂廃寺、宝光寺跡、笠寺廃寺などの古代寺院が営まれる。これらは対岸の近江大津宮造営に影響を受けているともいわれている。

図 2-13　木瓜原遺跡遺製鉄炉
（滋賀県教育委員会提供）

さらに南部の丘陵地帯では、野路小野山製鉄遺跡、木瓜原（ぼけわら）遺跡、観音堂遺跡、笠山遺跡、西海道（にしかいどう）遺跡などで、製鉄・鍛冶・鋳造・製陶などの生産が認められる。このうち、野路小野山製鉄遺跡では、整然と配置された 14 基を超える製鉄炉、木炭窯および生産を管理した管理棟とみられる建物など、製鉄の工程を示す遺構が発見されている。これら生産遺跡は、隣接する大津市域にも存在しており、当時、丘陵地帯において広範囲に生産活動が行われていたと考えられている。

奈良時代から平安時代にかけて、草津市域でも条里制が施行されていたと見られ、墾田永年私財法が制定され、有力寺社による土地所有が進むと、京都に近い草津では、皇室領や興福寺領、比叡山延暦寺領、日吉大社領などの荘園が増大したとみられる。

図 2-14　野路岡田遺跡（野路宿推定地）

イ）　中世

東山道が通過する草津は、交通上重要な位置にあり、源平合戦をはじめとする合戦の際に、多くの兵馬が行き交った。鎌倉幕府成立後は、東山道の宿駅地である野路宿が整備され、源頼朝による京都侵攻の拠点となった。

室町時代以降になると、草津は都の玄関口としての性格を強めていく。湖岸では、矢橋港、山田港、志那港が湖上交通の拠点として発達し、特に志那港は対岸の比叡山延暦寺の渡船場として、守護である六角氏などから重要視された。さらに、織田信長や豊臣秀吉らに重用された芦浦観音寺は、船奉行として湖上交通を掌握した。

また、平安時代には比叡山延暦寺の影響を受けて天台宗が、中世には浄土宗や浄土真宗が伝えられた。古代から中世の作とされる仏像や寺院などの歴史的建造物が市内に現存している。

図 2-15　かつての志那港（昭和 46 年）

図 2-16　重要文化財伊砂砂神社本殿

さらに、美術工芸品や建造物など有形文化財だけでなく、中世末期に畿内で流行した風流（ふりゅう）踊りに系譜を持つ草津のサンヤレ踊りや、鮒ずし切り神事、頭屋行事などの無形文化財が伝わるなど、宮座制度を色濃く残した古くからの信仰が、今も受け継がれている。

図 2-17　重要文化財木造阿弥陀如来及両脇士像（常善寺）

ウ）　近世

近世の草津は、東海道と中山道が合流・分岐する宿場があり、多くの人々が往来した土地であった。

慶長 5 年（1600）、関ケ原の戦いに勝利した徳川家康は、慶長 6 年(1601)には東海道、翌 7 年に中山道の各宿場に定書を発し、各地を結ぶ交通・運輸の体制を整えている。寛永頃には幕藩制の社会が確立し、この中で草津宿も、荷物の継立や旅人の休泊を担う宿場町として発展していくことになる。

図 2-18　追分道標

天保年間(1830～1844)頃の東海道沿いの各宿場について記録した「東海道宿村大概帳（とうかいどうじゅくそんたいがいちょう）」によると、草津宿には本陣が 2 軒、脇本陣が 2 軒、大小 72 軒の旅籠が軒を連ねていたといい、多くの人を出迎えた宿場町の規模がうかがい知れる。

本陣は参勤交代の大名や旗本、天皇の使いである勅使、公家など、限られた人々を迎えた施設であったが、このうちの 1 軒、田中七左衛門本陣の建物は、国史跡に指定されている。また東海道・中山道のみならず、東海道から分かれて矢橋港へ向かう矢橋道、守山宿から志那港へ延びる志那街道など、多くの道がある。さらに、湖上交通の拠点となった矢橋港・志那港・山田港も置かれており、特に矢橋港は近江八景の 1 つ「矢橋の帰帆」に数えられ、浮世絵にも描かれるなど、広く知られていた。

このように、各地からの情報や文化が流れ込んだ草津には、多彩な街道文化が形成されていた。弄石学（ろうせきがく）[5]を興こしたことで知られる木内石亭や、文人画家・横井金谷（よこいきんこく）など、多くの文化人を輩出した背景にも、人と物の行き交う土地柄があったのである。

図 2-19　矢橋の帰帆　歌川広重画「近江八景・矢橋帰帆」（草津市蔵・中神コレクション）

図 2-20　東海道名所図会に描かれた木内石亭資料

[5] 珍しい鉱物や奇石、化石、石器を収集・分類し考察する学問

エ） 近代・現代

明治5年(1872)明治政府により宿駅制度が廃止され、宿場町草津のあり方は大きく変化した。

明治 19 年(1886)には、大路井村戸長らが嘆願してきた、中山道・草津川隧道(草津マンポ)が完成し、明治 20 年(1887)には、そのそばに洋館 2 階建ての草津警察署が完成した。

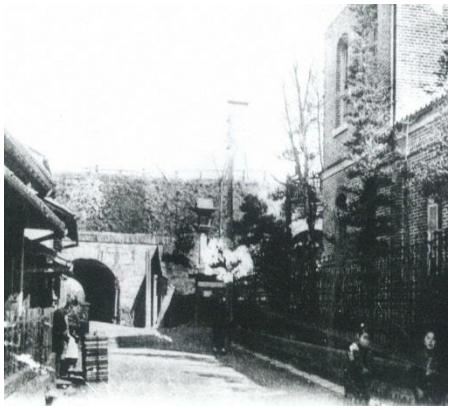

図 2-21　草津マンポ(明治)

明治 9 年(1876)には、杉江善右衛門らにより大津－山田間に蒸気船が就航した。さらに明治 22 年(1889)に湖東鉄道(現 JR 東海道本線)が開通し、草津駅が開業したことにより、水陸両交通の要衝の地としての本市の重要性が高まることとなった。その後、自動車道の整備や鉄道の利便性の向上により、移動手段としての湖上交通は次第に姿を消していった。また、かつての矢橋港から対岸大津への渡航経路には、昭和 49 年(1974)に近江大橋が架橋され、琵琶湖東西を結んでいる。

（３）社会環境

ア）交通

本市は JR 東海道本線(JR 琵琶湖線)、JR 草津線、JR 東海道新幹線ならびに名神高速道路、近畿自動車道名古屋神戸線(以下、新名神高速道路とする)、国道 1 号などが通る交通の要衝である。JR 草津駅と JR 南草津駅は県下での乗降者数第 1 位・第 2 位の駅として知られる。

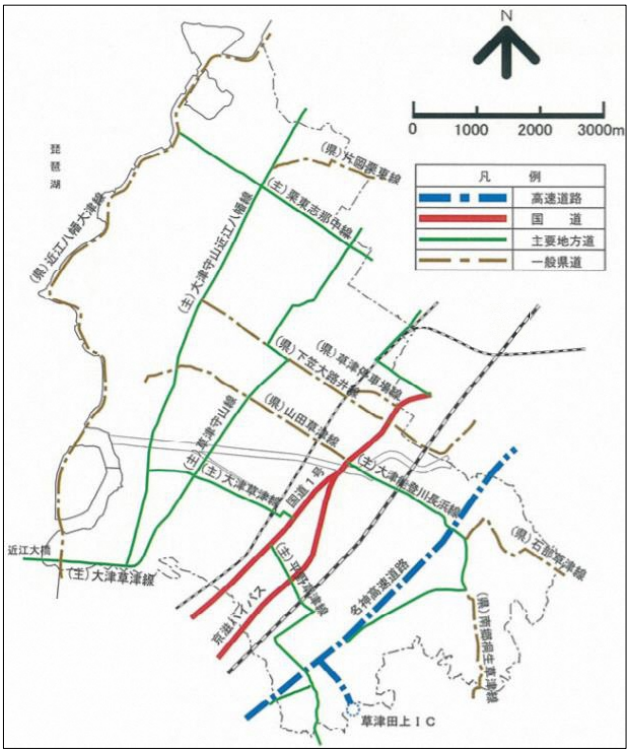

図 2-22　草津市の幹線道路網図

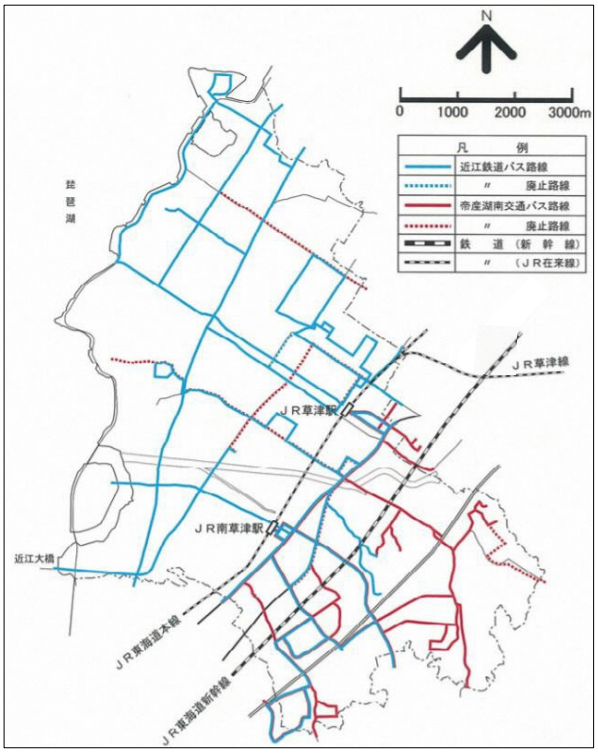

図 2-23　草津市の鉄道・バス路線図

(出典：草津市都市計画課『草津市都市計画マスタープラン』平成 18 年 3 月策定、平成 22 年 6 月一部変更)

イ）産業

本市では農業が盛んに営まれているが、中でも北山田地区一帯は戦前から県下最大のそ菜生産地として知られている。

市の花アオバナとして親しまれているオオボウシバナから作る青花紙は、友禅染の下絵の染料として使われている。さらに、近年アオバナ自体に血糖値の上昇をゆるやかにする効果があることが分かり、飲料や食品として活用されている。

昭和 57 年(1982)から栽培されるようになった草津メロンは、全国でも有数の糖度を持つことから人気の特産品となっている。

また、昭和 30 年代頃から草津市では工業化が顕著となり、野路町の丘陵部では名神高速道路の開通と同時期に工業団地の開発が行われた。このほか、山寺町や馬場町にも工業団地の開発が進み、県下有数の工業地域となった。

一方で他の地域に目を向ければ、近年は先述した交通の利便性から、大企業の拠点が多く進出し、また、道路などのインフラ整備が進み、郊外に全国チェーンの店舗の出店が増加する傾向にある。

ウ）人口推移

平成 27 年度国勢調査の結果を受けて公表された滋賀県の人口は約 1,413,000 人で全国第 26 位、人口増加率は 0.17%で全国第 7 位ではあるものの、増加率は昭和 50 年(1975)の 10.77%をピークに低下し続けている。

一方、草津市は鉄道などの整備によって京阪神のベッドタウンとして発展し、人口増加を続けている。昭和 40 年(1965)に約 38,000 人であった人口は、現在（平成 30 年 4 月）約 133,000 人を数え、さらに 2025 年に人口約 143,000 人となる予測がある。

そして、平成 17 年(2005)から 10 年間の世代別人口の推移と内訳に目を向けると、現役世代にあたる 20～64 歳人口が約 8 万人（約 58%）を維持し、19 歳以下の若年層もわずかながら増加を続けている。しかし、割合をみると 65 歳以上の高齢者が増加傾向にあり、平成 27 年(2015)には全体の 20%を超え、市域では農村部で高齢化が進んでいる。

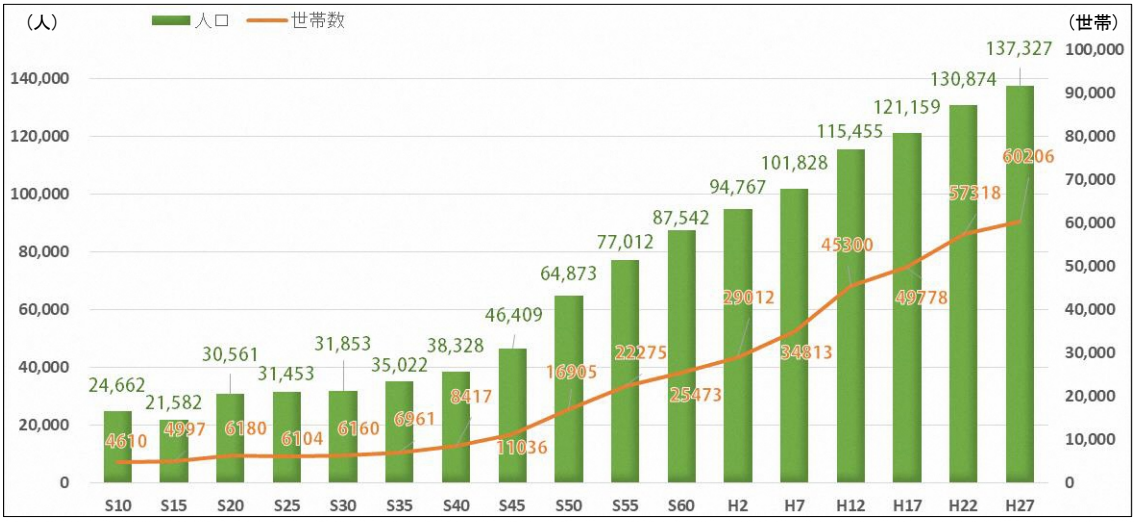

図 2-24　草津市の人口・世帯数の推移　（「国勢調査結果」（総務省統計局）より作成　※各年 10 月 1 日現在）

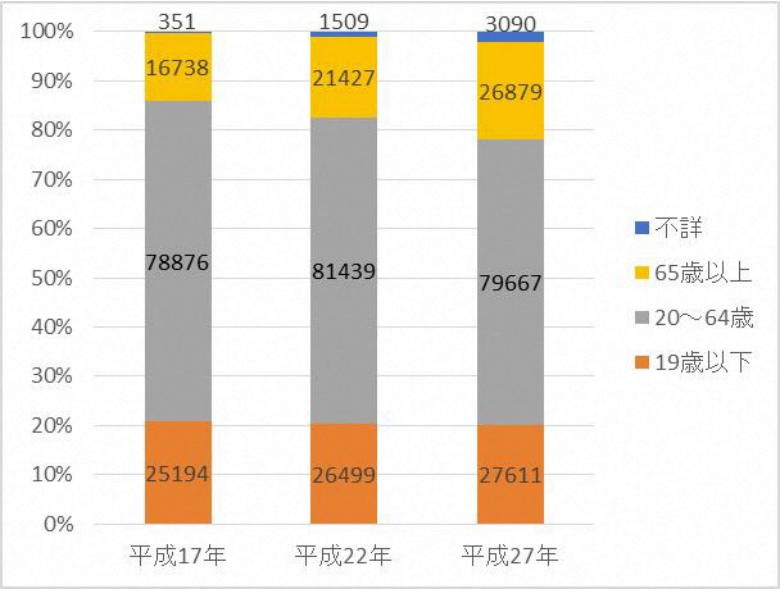

図 2-25　草津市世代別人口の比率

（「国勢調査結果　人口等基本集計」（総務省統計局）より作成　※各年 10 月 1 日現在）

２　草津市の歴史文化の総合的把握

（１）　指定文化財の状況

本市の指定文化財件数は、現時点で 94 件である。

内訳として、有形文化財 65 件(国 23 件、県 10 件、市 32 件)、民俗文化財 8 件(県 1 件、市 7 件)、史跡名勝天然記念物 8 件(国 3 件、市 5 件)、選択無形民俗文化財 6 件(国 1 件、県 5 件)、登録有形文化財(建造物)5 件、登録有形民俗文化財 1 件、重要美術品指定品 1 件である。

表 2-3　指定文化財一覧

種別			国	県	市	計
有形文化財	建造物		8	2	4	14
	美術工芸品	絵画	5	2	7	14
		彫刻	9	2	13	24
		工芸品	1	0	3	4
		書籍・典籍・古文書	0	3	3	6
		考古資料	0	1	2	3
		歴史資料	0	0	0	0
無形文化財			0	0	0	0
民俗文化財	有形民俗文化財		0	1	4	5
	無形民俗文化財		0	0	3	3
記念物	史跡		3	0	3	6
	名勝		0	0	0	0
	天然記念物		0	0	2	2
文化的景観			0	0	0	0
伝統的建造物群			0	0	0	0
選定保存技術			0	0	0	0
選択無形文化財			0	0	0	0
選択無形民俗文化財			1	5	0	6
登録有形文化財			5	0	0	5
登録有形民俗文化財			1	0	0	1
重要美術品			1	0	0	1
計			**34**	**16**	**44**	**94**

（２）　未指定文化財の状況

本市では、滋賀県教育委員会が行う各種未指定文化財調査に併せて市内悉皆調査を実施し、未指定文化財リストなどを作成している。また、市でも独自に未指定文化財の調査を実施し、その内容などの把握に努めている。ただし、これら調査の実施から年月が経ち、あるいは調査目的も今日の状況から考えれば異なるものもあることから、新たな観点から調査を行う必要がある。

さらに、本市では平成 30 年(2018)6 月から平成 33 年(2021)3 月(予定)にかけて、これまでの調査後に新たに発見された文書資料を含め、草津宿本陣に残る約 8,600 点の古文書などについて、専門家を交えて包括的に調査する「草津宿本陣歴史資料調査」を進めている。なお、この調査については、期間中に「草津宿本陣資料調査だより」を発行することで、調査成果の情報発信に努め、さらに、調査後には報告書を刊行し結果を取りまとめて周知を図るとともに、当時の本陣や宿場の状況がさらに明らかとなることが期待される。

表 2-4　これまで草津市が実施した調査一覧

名称	調査主体	調査年
滋賀県の祭礼行事調査	滋賀県教育委員会	H3～6 年度
滋賀県の近代和風建築調査	滋賀県教育委員会	H4～5 年度
滋賀県の伝統食文化調査	滋賀県教育委員会	H6～9 年度
滋賀県の近世民家調査	滋賀県教育委員会	H7～9 年度
滋賀県の民俗芸能	滋賀県教育委員会	H7～9 年度
滋賀県の近代化遺産調査	滋賀県教育委員会	H10～11 年度
滋賀県の自然神信仰調査	滋賀県教育委員会	H14～18 年度
滋賀県石造建造物調査	滋賀県教育委員会	
芦浦観音寺文書調査	草津市教育委員会	S56 年度
草津市文化環境保存修景計画基本調査	草津市教育委員会	H1 年度
上笠天満宮講踊調査	上笠天満宮講踊保存会	H1～2 年度
草津宿本陣田中家史料調査	草津市教育委員会	H3 年度 H12～13 年度
中神良太氏収集資料調査	草津市教育委員会	H6 年度
渋川の花踊り調査	渋川花踊り保存会	H11～12 年度
草津のサンヤレ踊り調査	草津市教育委員会	H12～14 年度
草津宿総合歴史的調査―歴史的景観編―	草津市教育委員会	H13 年度
木内石亭(西遊寺鳳嶺・願行寺了観)関係資料調査	草津市教育委員会	H14～16 年度
草津宿歴史的総合調査	草津市教育委員会	H17 年度
近江国長安寺文書調査	草津市教育委員会	H20 年度
常善寺須弥壇調査	草津市教育委員会	H21 年度
旧草津川の思い出調査	草津市教育委員会	H22～23 年度
惣社神社フジ古木調査	草津市教育委員会	H23 年度
山内家文書資料調査	草津市教育委員会	H23 年度
浄運寺木造釈迦如来立像調査	草津市教育委員会	H25 年度
小槻神社男神坐像調査	草津市教育委員会	H26 年度
市内歴史的建造物調査	草津市教育委員会	H27 年度～
青花紙の製作に関する調査研究	草津市教育委員会	H28～29 年度
下寺観音堂仏像群調査	草津市教育委員会	H29 年度
草津宿本陣歴史資料調査	草津市教育委員会	H30 年度